

「居場所」の建築化



Keywords

居場所 図書館 公共建築

DZ19163松村 拓海

1. はじめに

1.1 背景と目的

コロナ、技術の発達、オンライン化などにより人間関係の希薄化を感じる。時代の流れと共に人々の「居場所」はオンラインへと移行しつつある。自分中心からスマートフォン（オンライン）中心へと変化し、自分のアイデンティティが失われてきた。SNSのいいね数や視聴回数などといったオンライン上の他人からの評価（承認欲求）のためにスマートフォンを使用することが多くなっている。これらの問題への解決には自分のアイデンティティを見失わない「居場所」が必要であると考えた。そこで私は図書館の「居場所」化を考えた。現在では主に図書や勉強機能のみの図書館が多いが、時代とマッチしなくなっている。私は本研究では「居場所」機能を持つ、今後あるべき図書館を提案する。

1.2 研究の必要性

社会保障制度が不十分だった頃は人々がお互い助け合い、支え合いながら生活してきた。今では技術の発展と社会保障制度の向上により個人で生活できるようになった。年金制度の充実により複数世帯から核家族へと個人の尊重が大事な時代である。しかし生活の充実に伴い、人間関係の希薄化という副作用が発生した。希薄化で人々の「居場所」がインターネットやSNSになろうとしている。「令和元年度 青少年のインターネット利用環境実態調査」によると図1のような結果となった。高校生の半分以上の人たちが一日3時間以上スマートフォンを使用している。さらには3人に1人が5時間以上スマートフォンを使っている。これに伴い、コミュニケーション不足による孤立、インターネット上でのトラブルによる炎上やいじめといった問題が起こる。さらに発展して社会的孤立による虐待や生活困窮、トラブルによる自殺や犯罪などのさらなる問題へと発展する。問題が起きた後の対処ではなく、問題の根本から解決することができるのが「居場所」の設計である。

「居場所」化のために図書館を選定したのには以下の理由がある。一つ目は「居場所」と図書館の相性の良さである。「居場所」のような例としてカフェや公園などが挙げられる。くつろいで一息つくためのカフェや誰もが気軽に立ち寄ることのできる公園。公共性の高い図書

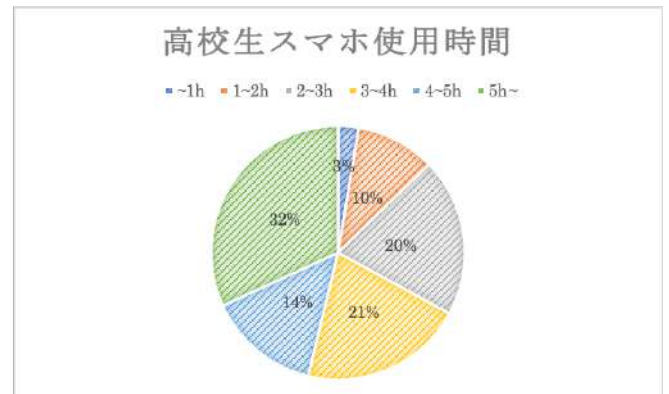


図1 高校生のスマートフォン利用時間

館では二つのことを同時に実現できる。二つ目は大田区の図書館の老朽化である。図2から読み取れるようにあと10年ほどで、9割以上の建物が耐用年数を迎えてしまう。図書館の建て替えは遠くない未来に必要なである。三つ目は図書館の機能不足である。技術の発展により書籍のデジタル化や働き方の変化により、図書館に要求される機能も変化してくる。今の図書館は図書と勉強の用途でしか使うことができない。本設計では図書館の新たな提案を行う。

図2 図書館の開館日



2. 計画概要

2.1 対象敷地

対象敷地は東京都大田区東蒲田に位置する大田区立蒲田図書館(以下から蒲田図書館と省略する)を対象とする。蒲田図書館に大田区立東蒲小学校が隣接し、向かいには公園と大田区総合体育館が位置する。大田区体育館は1965年に東京オリンピックを記念して建設されたが2008

年に老朽化により閉鎖した。2012年に大田区総合体育館として竣工。現在の東蒲田公園は体育館の敷地であったが、周辺建築からオフセットするために整備された。蒲田図書館は1960年に開館し築62年である。このように機能だけではなく住環境も充実させようとする動きが出てきている。本敷地の特徴は図3の地図より小学校、公園、体育館、幹線道路、住宅が近く静と動の空間が共存している。



図 3 敷地とその周辺地図

2.2設計趣旨

老朽化によるたくさんの図書館の建て替えが必要になってきている今、ハード面及びソフト面両方の変化が求められている。本研究では次世代を見据えた図書館の提案を行う。図書館が本の検索機能だけではなく、訪れた人が散策しながら本を探したり休憩できるような空間設計する。それにより利用者が自分の必要な「居場所」を探ることができる。安藤忠雄が設計したこども本の森は良い例である。図4のように2階から3階を繋ぐ勾配の緩い階段では上り下りの機能に加えて椅子としての機能も備えている。さらに本棚の水平材は本の収納だけでなく、腰を掛ける用途としても利用されている。このような抽象的な空間では意図していない複合化が起こる。抽象的な空間では探索性が加わり、多様で自由度の高い



図 4 こども本の森

利用方法が可能。その場所から得る受容感により「居場所」のような空間となる。この図書館を設計することで今までの「居場所」がスマートフォンから建築に移り、人間関係の希薄化が解消される。

2.3建築プログラム

延床面積：2624㎡

敷地面積：1278㎡

建築面積：867㎡

・プログラム

図書スペース：993㎡、道：338㎡、フリースペース：252㎡、ギャラリー：238㎡、屋上テラス：165㎡、事務スペース：180㎡、カフェ：36㎡、シェアキッチン：36㎡、工房：31㎡、

この図書館では機能ごとに空間を分断していくのではなく、動線の途中に機能を配置した。そうすることで、歩きながら目的地へと向かい、その道中で様々な体験を促す設計となっている。

終わりに

本設計における図書館への考え方は、蒲田図書館だけではなく、全国での応用が可能となる。公共建築を「居場所」化することで人間関係の希薄化が解消される。建築を学び今後建築業界で携わる人間として、このような問題を建築的アプローチで解決していきたいと考える。

参考文献

大田区ホームページ

<https://www.city.ota.tokyo.jp/shisetsu/toshokan/index.html>

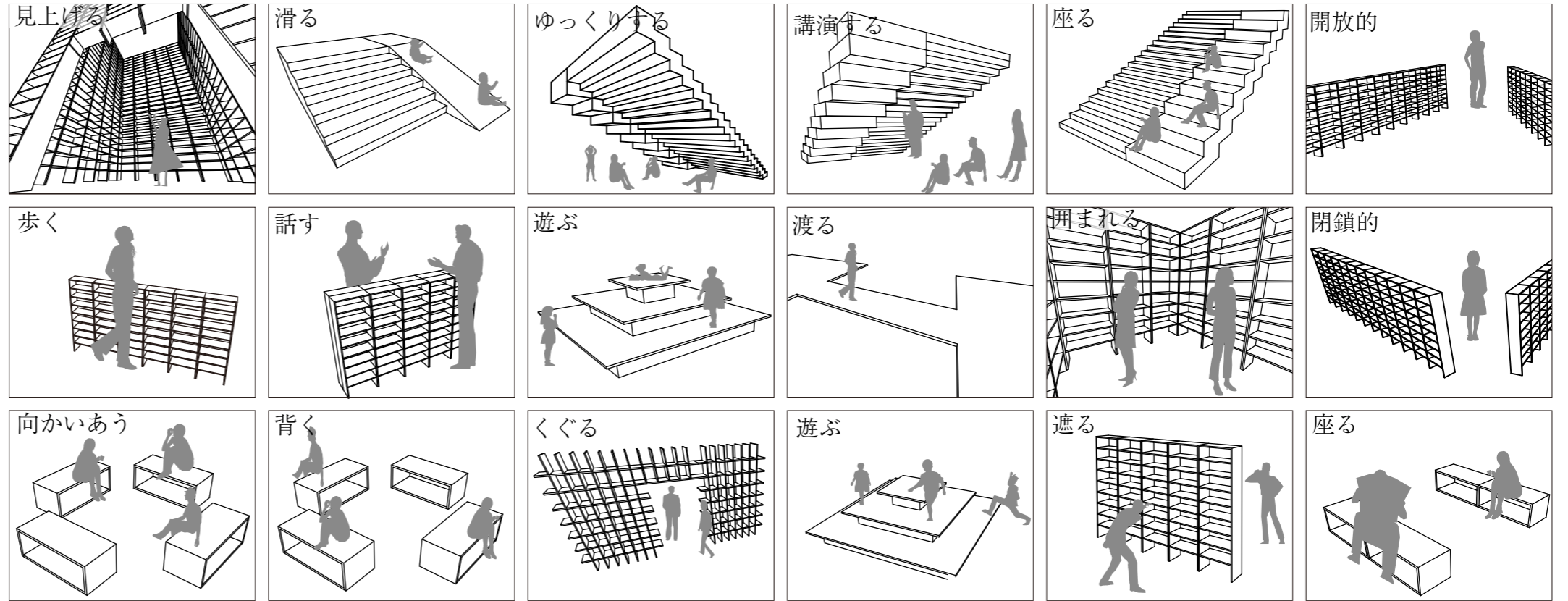
国土地理院

<https://www.gsi.go.jp/>

内閣府ホームページ

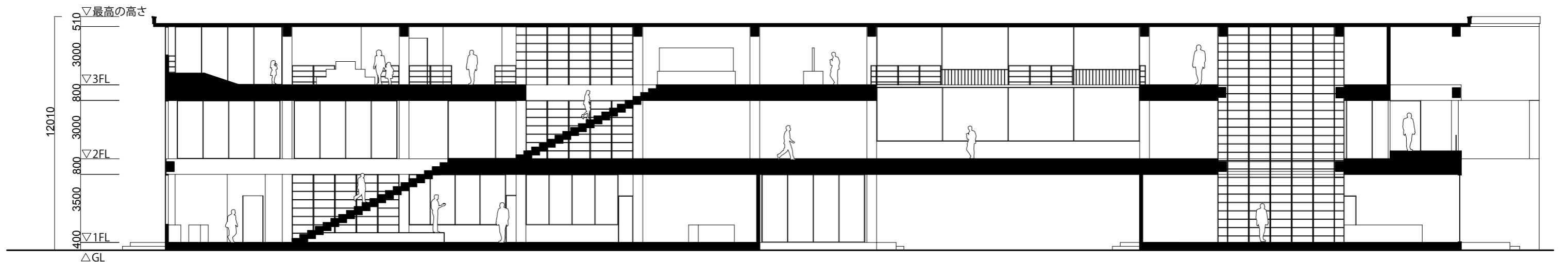
https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/net-jittai_list.html

00 梗概
「居場所」の建築化



Concept

日本にある多くの図書館は図書スペースと読書・勉強スペースがそれぞれ専用の場所として存在する。技術の発達により図書館の需要は減り利用者が現象している。この設計では従来の図書館にある検索性に探索性加えて、利用者が自ら「居場所」を探すことをテーマにした。図書館が本の検索機能だけを持つのではなく、訪れた人が散策しながら本を探したり休憩できる様な空間をつくる。今後の図書館の指針となる建築を提案。



yly2 断面図 1/200